は博士が用意周到に諸先輩との間に諒解をつけて置かれた結果ではなかつたかと想像する。間もなく二月十五日にはこれら三人の理事が集つて豫算案を作り、三月十日には東京京都の理事の外、文化事業部長や內部の事務官も參加して最初の理事會を東京で開いたが、大體京都で作つた豫算案を認めることゝなり、重ねて四月十四日に第二回理事會を開いてこれを決定した。學院の名稱も實にこの會議で決つたことで、外務省側では東方文化院といふ名を提示したのを、「學」の一字を加へることを理事側で主張して、ついにそれに定まつたのであつた。

かくして學院、從つて研究所創立の事は大體軌道に乘つて來たが、しかもその研究の方向とか範圍とか研究員の選定とかいふ實質問題に進んで來ると、衆議またなかなか一致しない。どこまでも純學術研究でなければならぬと强く主張するものもあれば、化導啓蒙のことも考ふべきであるといふものもあり、既に大成した知名の士を聘して急速に所の成績を擧げるべきだと說く一方には、將來を期し得べき若き人才を選任するにかぎるといふもあり、三月十九日の評議會では、これらに關する原則の議定に當つて甲論乙駁して讓らず、ついにはハラハラするやうな場面が演出せられるまでに高潮に達したのであつたが、困惑の色の濃い狩野博士の提議によつて、兎も角研究員や助手の候補者を各評議員から推薦し、それを三人の理事で協議詮衡した上、一週間の後に更に評議會を開いて決定することに落着した。その日の今は亡きあの顏この顏と思ひ浮べると、過ぎ去つた二十年の昔ながら、光景躍如として眼前に彷彿し、無量の感慨を禁じ難い。やがて決定せられた初めての京都研究所員の顏ぶれと研究題目とを見れば、かゝる群議に對して、博士が如何なる方針で望まれたかを明らかに知り得るであらう。

京都研究所は昭和四年四月から、博士を主任として當時の京都帝國大學文學部陳列館の一室を借りて發足したの